

津田塾大学における英語教育

平野 幸彦・高橋 歩・ハドリー 浩美

English Language Education at Tsuda College: Providing intensive training for students in all departments

HIRANO Yukihiko, TAKAHASHI Ayumi, HADLEY Hiromi

This paper reports on the four-year integrated English curriculum at Tsuda College, designed to help students to improve their language skills as well as to motivate them to further their field of study globally. The aim is for learners to be able to actively participate in today's international community. The development of this curriculum was recognized as an innovative project under the MEXT's Distinctive University Education Assistance Programs in 2004. We will first offer an overview of the curriculum, and then report on the classrooms observed on May 31, 2005. This will be followed by the results of a Q and A session with the faculty and staff members at Tsuda.

Keywords : English language curriculum, classroom observation, four skills, material development, audio-visual center

はじめに

去る2005年5月31日、我々は東京都小平市にある津田塾大学を訪問し、そこで実施されている英語教育を視察してきた⁽¹⁾。以下、その調査結果をご報告する。

1. 発展し続ける英語教育プログラム

津田塾大学の「発展し続ける英語教育プログラム」は、文部科学省の平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択された。

ボーダーレス化が急速に進む国際社会が求める「優れた人材」の要件とは、高い専門性を有し、高度な英語力を備えていることだと、津田塾大学では考えている。この考えに基づき、4技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）のバランスを重視し、英語のスキルを総合的に伸ばすプログラムが「発展し続ける英語教育プログラム」だという。国際的視野を持ち、IT化が進む時代に即応できる発信力を身につけた人材を育成することを目標としたこのプログラムは、つぎの4つの特色を有している。

- ・視聴覚リソースを用いた多彩な内容の授業
- ・3・4年次の多様なニーズに応える演習重視の授業
- ・体系的な「書く」訓練による発信能力を培う授業
- ・英語を通して高度な専門性を培う授業

2. カリキュラム

英語教育プログラムでは、1年次から4年次まで継続的に全学科（英文学科、国際関係学科、情報数理科学科）において体系的で多彩かつ内容豊かな英語カリキュラムを創意工夫し提供している。4技能の基礎訓練においても、その目標を言語運用スキル獲得にとどめず、内容的に学生が高いモチベーションを持って取り組めるように教材を開発している。

授業は、習得する技能により、つぎの4種類に分けられている。

- ・リスニングと発音
ニュースや映画、ビデオ教材を使って、発音と聴き取りのレッスンをを行う。繰り返しトレーニングを積むことにより、自然にリスニング力がアップしていく。
- ・スピーキング
自分の意見を英語できちんと表現できることを目標とする。ネイティヴスピーカーによる丁寧な指導で、ハイレベルの会話力を身につける。
- ・リーディング
英語のテキストを自在に読みこなすテクニックを身につけることを目標とする。原書の講読を通して、現代世界の息吹を肌で感じ、専門分野だけでなく、多彩なジャンルの知識を身につける。
- ・ライティング
簡単なパラグラフライティングから、フォーマルレ

ター、リサーチペーパーまでトレーニングを重ね、
確かな文章表現力を養成する。

3. 教材

学生が高いモチベーションを持って授業に取り組むよう、内容豊かな教材を開発している。これは、外国語学習においては、学ぶ教材の内容が魅力的であることがその外国語習得の成功につながるという考えに基づいている。

例えば、英語D（リスニングと発音。英文学科と国際関係学科1年次生が受講）の授業用教材は、教員と職員が協力して作成している。AVセンター（後述）内の教材作成室にて職員が常時BBCやCNNの放送を録画し、その中から授業に利用できそうなものを教員が選ぶ。10分程度のニュースやドキュメンタリーが多いようである。教員は取り上げた題材のスクリプトを作成し、学習する語彙や聴き取りのポイントなどを決める。教材とするのに必要な吹き込みを、ネイティブスピーカーの教員が行う。教員の指示により職員がそれを編集し、約20分の教材を完成させる。このようなやり方で作られた教材を年間26本使用し、そのうち半数を毎年更新している。

教材を作成する教員は専任の日本人とネイティブスピーカー各1名。授業2コマ分の手当が支払われる由。

4. 評価

試験および評価は授業担当教員が行う。教科ごとの統一試験は行われていない。その他、全学年4月と12月に、CELT（Comprehensive English Language Test）を利用した一斉テストを行う。

5. 教育研究施設

・AVセンター（Audio Visual Center）

AVセンターには、AVライブラリーや、AV教室、CALL教室、LL教室、スタジオ等の設備があり、語学教育の中核として機能している。AVライブラリーには、約60言語にもわたるオーディオテープ、ビデオテープ、CD、レーザーディスク、DVDがあり、語学資料だけでなく、歴史、ドキュメンタリー、数学等に関する幅広い視聴覚資料を取り揃えている。英語の授業で使用されるビデオ教材もこのライブラリーで視聴でき、学生はここで予習、宿題、復習をするように指導されている。

・その他

大学としてCNNおよびBBCの視聴契約を結んでおり、学生の集まるホールなどで常にこれらの番組が流されている。

6. 授業見学

外国語科目と英文学科必修科目のうち、以下の4クラスの授業を実際に見せていただいた⁽²⁾。

・英語演習ⅢC（英文学科3年次必修科目）

当日受講者数18名。ビデオを用いたリスニングのクラス。授業はすべて英語で行われる。History Channelの番組を使ったオリジナル教材を使用。リスニングにおける文法知識の必要性を強調していたことが印象に残った。

・講読AⅠ（英文学科1年次必修科目）

当日受講者数22名。リーディングのクラス。日本人教員の担当ながら、授業はすべて英語で行われる。テキストはTennessee WilliamsのThe Glass Menagerie（1945）。学生に自発的に手を上げさせ、テキストを音読させ、内容について英語で質疑応答を行っていた。

・英語D（英文学科・国際関係学科1年次必修科目）

当日受講者数39名。リスニングと発音のクラス。LL教室で行われ、CNNの番組を使って作成したオリジナルビデオ教材を使用（教材タイトル：Hairdressers Who Help）。ビデオを見てvocabularyやuseful expressionsを学習し、聴き取り練習をする。このビデオは前述のAVライブラリーで視聴でき、学生はそこで予習、宿題、復習を行うことになっている。

・英語演習ⅢA（英文学科3年次必修科目）

当日受講者数16名。リーディングとライティングのクラス。4つのグループに分かれて英語でディスカッションを行っていた。これは後に課されるライティングの基となる。ディスカッションの題材はgender, language, media bias, discriminationなど。1セメスターで1,000語のエッセイを3回（合計3,000語）書くことが求められる。

7. 先生方との質疑応答

授業見学後、津田塾大学の英語教育を支えておられる学芸学部英文学科の3名の先生方、すなわち田近裕子教授、Mary E. Althaus教授、吉田真理子助教授と、事務方から落合美代教務課長の臨席を賜わり、質疑にに応じていただいた。以下にその要点を記す（順不同）。

問：「英語の世界的位置づけが従来の英語を母語とする国ぐに中心からボーダーレス社会の共通語へと移行する」（特色GP申請書）中、国際語としての英語教育をどのように実践しているか？

答：英文学科の学生は2年次以降の原書講読のために英語を第1外国語として学ぶ。しかし英語教育は大学全体の問題であり、他学科からのニーズもふまえ、より一般的な英語教育を提供すべきだと考えている。英語教員は従来英文学科のみに配置されてきたが、近年他学科にもネイティブの英語教員が採用され、学科の壁を超えた連携を試みている。

問：英語教員の構成は？

答：英文学科の専任教員は28名で、全員が専門科目の他に、英語の授業を担当する。英語教育学を専門とする者は5名だが、英語教育学が専門でない教員が英語の授業をすることは内容の点から意義があると思う。日本人以外の教員はすべて英語圏出身のネイティブスピーカー。非常勤講師は約70名で、そのうち1割強がネイティブスピーカーである。

問：日本人教員はどのように授業を行っているか？

答：授業自体を英語で行っている場合も多い。英語科目以外でも、「ブリティッシュ・カルチャー」や「植民地政策」といった内容の授業は英語で行うことがある。日本人教員が英語で授業を行うことで、学生にとってのロールモデルとなっている。

問：「教材作成にあたる専任教員」を採用した経緯は？

答：10年ほど前までは日本ではTESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) に対する理解が少なかったが、AVセンター設置に伴い、英語教育学を専門とする教員を新規採用することが必要と判断された。教材作成に別途手当が支払われることについては、他の教員や大学当局から反発があったが、膨大な時間とエネルギーが要求されるため、授業実施とは別に人員を確保することが必要と考える。

問：学生による授業評価アンケートはどのように活用しているか？

答：授業評価アンケートは前期・後期の2回行っているが、結果をグラフにはしていない。また評価の結果は採用・昇進の参考にはされない。授業評価アンケートは必ずしもカリキュラム評価になるとは限らないと思う。

問：TOEICやTOEFLなどの外部検定試験は活用しているか？

答：外部検定試験は学生が個人的に受験しており、英語科目として対策用の授業は設けていない。しかし卒業生の協力により有料の準備講座が開かれており、学生の人気が高い。

注

(1) 本視察には、Gregory Hadley (新潟国際情報大学 情報文化学部教授) と杉村使乃 (敬和学園大学 人文学部助教授) の両氏も同行した。

(2) 当日見学はできなかったが、イクステンシヴ・リーディング (多読) とライティングのクラスについても教材や答案のサンプルを見せていただき、説明を受けた。

参考資料

津田塾大学, 平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」申請書

津田塾大学, 「発展し続ける英語教育プログラム～ボーダーレス時代の多様なニーズに応えて～」(パンフレット)

津田塾大学, 「平成16年度文部科学省『特色ある大学教育支援プログラム』発展し続ける英語教育プログラム～ボーダーレス時代の多様なニーズに応えて～」(英語教材サンプルDVD)

津田塾大学, 「平成16年度文部科学省『特色ある大学教育支援プログラム』フォーラム報告 グローバル化していく英語—昨日、今日、明日—」(報告書, 2005年3月)

津田塾大学, 『履修要覧 2005』

津田塾大学, 『津田塾大学 Tsuda College Guidebook 2006』

津田塾大学ホームページ

(とくに <http://www.tsuda.ac.jp/ja/guide/C6.html> および http://syllabus.tsuda.ac.jp/db/syllabus/list_fl.html)

杉村使乃, 「津田塾大学 訪問」(敬和学園大学学内報告会レジュメ)

杉村使乃, 「津田塾大学 特色ある大学教育支援プログラム (特色GP)『発展し続ける英語教育プログラム:ボーダーレス時代の多様なニーズに応えて』」(敬和学園大学学内報告会レジュメ)